

吉井勇の戦中日記
——
「洛東日録」抄

細
川
光
洋

【翻刻】

吉井勇の戦中日記——「洛東日録」抄

細川 光洋

京都府立京都学・歴史館の吉井勇（一八八六～一九六〇）資料には、戦時下の吉井勇日記として「洛東日録」「北陸日記」「續北陸日記」の三篇（ノート二冊）が残されている。^[1]これらの日記や手帖は長らく出納不可であったが、二〇一五年秋より研究目的での特別閲覧が認められ、稿者は関係者の諒解の下に調査を続けている。

B 6判ノート二冊にペン書きされた戦時下の日記三篇の内容及び執筆時期は、次の通りである。

【洛東日録／北陸日記】 緑背ノート1（資料番号2455）

「洛東日録」京都岡崎円勝寺町への移転から富山八尾に疎開するまでの記録（昭和19・9・20～昭和20・2・8）。

「北陸日記」常松寺仮寓期を中心とした八尾時代前半の記録（昭和20・2・9～6・23）

【續北陸日記】 茶背ノート2（資料番号2456）

「續北陸日記」小谷契月居に仮寓した八尾時代後半から終戦を経て京都八幡の宝青庵に入居するまでの記録（昭和20・6・23～10・26）。

八尾時代の疎開日記「北陸日記」「續北陸日記」については、これまで本紀要で三回にわたり翻刻文を紹介してきた。これにより、詳細が不明であった疎開生活の実態や各地を転々とした経緯・移転時期などについて明らかになった。戦後に刊行された歌集『寒行』、『流離抄』に収められた歌の成立を考える上で、重要な資料となるものである。また、「續北陸日記」からは、戦争末期に八雲書店から決戦歌集叢書の一つとして『^{かんすぎ}神杉』の刊行を予定していたことも明らかとなり、その初稿原稿も京都学・歴史館に所蔵されていることがわかった。

「洛東日録」はこれらの疎開日記に先立つ昭和十九年秋から同二十年二月にかけての記録で、現在確認できる勇の日記としては、最も古い時期のものである。緑背のノートの前半が「洛東日録」、後半が「北陸日記」と題されている。「日録」という呼称は依田學海の『學海日録』などが知られるが、勇の他の日記では、昭和二十二年二月の南紀への旅の記録「南紀日録」以外には用いられていない。

昭和十九年九月下旬に移り住んだ岡崎円勝寺町の寓居を、勇はこの年三月に刊行した歌集『²玄冬』にちなんで「²玄冬居」とよんだ。岡崎円勝寺町での五ヶ月ほどの仮寓につい

て、勇は後年の『私の履歴書』で次のように語っている。昭和十九年の十月には、東山区岡崎円勝寺町に移ったが、もうその時分には本土の爆撃がだんだん烈しくなつて、京都の空も毎日のように通り過ぎてゆく敵機の影を、見ない日とてはないようになった。敗戦の色がだんだん濃くなつてくると同時に、京都もいつ爆撃のために灰燼となつてしまふかわからないと思うと、じつと落ちついてもいられなくなつた。それでとうとう昭和二十年二月には、荷物を知恩院の塔頭良正院に預け、私たち二人は身ひとつとなつて、越中八尾に疎開していった。³⁾

右にいうように、今回紹介する「洛東日録」は、岡崎円勝寺町への移転から、「東山馬町空襲」を経て、富山八尾へ疎開するまでの約五ヶ月間の日記である。十月の富山・北陸行、疎開の契機となつた一月の馬町空襲、八尾への疎開決定までの経緯などが、日増しに厳しさを増す戦況とともに克明に記録されている。日記には、谷崎潤一郎や川田順、前川佐美雄ら関西在住の文化人たちとの交流に関しても詳細に書き留められている。

警戒警報・空襲警報に脅かされる切迫した状況下にあつた「玄冬居」時代は、仮寓期間も短く残された歌も少ないことから、疎開に至る経緯も含めて不明な点が多かつた。戦時下の勇の動向や当時の京都の様子を知る上で、「洛東日録」の記述は貴重であろう。なかでも「東山馬町空襲」の記録は、同時代の証言として歴史的な重みを持つ。

なお、「洛東日録」の翻刻及び本稿執筆にあたっては、これまでと同様にご遺族ならびに所蔵館と連絡を取り合い

ながら行つた。日記には適宜読解の助けとなるよう註を施し、併せて解題を附した。

表記について

本稿では、原則として原本の記載、形式をそのまま再現するように努めた。日付の囲み表示も、原本によるものである。

表記については以下の通りである。

- 一 漢字は、旧字体のものも含めて、可能な限り原本記載の通り表記する。
- 二 変体がな・合字は現行の表記に改める。
- 三 かな遣い、送りがな、拗音・促音の表記は原本記載の通りとする。ただし濁点がなく難読のおそれがある場合は濁点を補う。
- 四 おどり字は、漢字の場合「々」に統一するほか、原本記載の通りとする。
- 五 振りがな・傍点・傍線は原本記載の通りとする。
- 六 補いうる脱字並びに空白箇所は「」で補う。また、単純な誤字と思われるものには、^マを附す。
- 七 欄外記載は、各日の記述の後に「右欄外」「左欄外」として示す。勇の日記では欄外指示を概ね×で示しており、原本記載の通りとした。
- 八 各日の日記は一続きの文章と見なし、追い込みとした。（本日記中には、今日の人権意識に照らして不適切な表現箇所がみられるが、時代背景や記録の性質、および著者が他界していることなどを鑑み、原本通りの記載としている。）

翻刻「洛東日録」

昭和十九年九月

二十日 愈今日は北白川より岡崎へ移居の日也。六時起。曇。荷造りに従ふ。馬車二台。家主新田氏など手傳ひに来る。風間氏その他に挨拶の後八時過予一人先に新居に来る。岡崎円勝寺町二九、有隣館の西隣にして、前に疏水流れ、岸に柳樹青々たり。第一回の荷九時過着。午頃亀井氏来訪。午食の弁當——食ふ。午后、第二回の馬車二時過に来る。これにて全部の荷を運び了る。馬車代手傳等を含めて八十円なるに依り、慰勞として百円與ふ。皆よき人にて仕合なりき。秋田屋より手傳ひの女二人来れども美術館使ひを頼みしのみ。電燈、水道共に通ず。孝子五時頃北白川の家の掃除を了りて着。亀井氏より届けられたる煮べと蟹の罐詰にて晩食。滋東京通信隊となりたる旨報あり。九時頃就蓐。猶旅に在るが如し。

〔右欄外〕×を一人

二十一日 六時起。晴。上圍時出血甚し。午前、津田氏を訪ひ敷金及び家賃を渡し、家主の藤井家を訪ひて挨拶。第二有隣館にて藤井氏に會ふ。美術館にゆきたる后、高原、小西、藤井、町田、堀、町會長等に挨拶。井ノ本君を訪ひたるも不在。大八洲書房に臼井君を訪ひ轉居通知状を頼む。飯れば谷崎潤一郎君在り。ホットケーキの午食を共にしたる后西本願寺にゆく。車中宇野君に會ふ。小寺、黒田氏等

滿洲へ赴く由。二時頃西本願寺着。勤皇僧の法要に列席して焼香。新村、吉沢、菊地、梅原氏等に會ふ。利井、菊地両氏の講演、諸富氏の詩吟等あり。終つて四時より飛雲閣にて茶と歌の座談會。藪ノ内宗匠の点前にて光明、尊融両蓮杖始め數十名出席。予は勤皇僧讚歌十首を讀む。會終つて齋出づ。酒三献。供養(五十金)を供せられ七時過會を閉づ。飯途電車断線、四條河原町より歩いて飯宅。町會事務員久保氏酔ふて来る。十時頃就蓐。眠り浅し。

二十四日 六時過起。雨霽る。本願寺のために揮毫。懷紙二、短冊六。出来わるし。井ノ本君来訪。葉書を書く。上圍時出血止む。午前、知恩院に細井氏を訪ひたる后名刺屋を探して大丸まで至る。遂に見當らず。十二時過飯宅。午食、ホットケーキ。午后、藏書の整理。村上氏来訪。晩食に誘はれたれど断る。孝子北白川にゆく。午睡少時。「古泉千樞とその歌」を讀む。数日ぶりにて歌を作る。「秋日移居」数首。細井氏より伊予の焼鯛を届けらる。「鉄幹歌選」の予選を始む。六時過孝子飯り来る。久枝北白川に來り枝豆、柿等置きゆきし由。晩食、鯛塩焼、鯛のあら味噌汁、枝豆等。一酌、陶然たり。十時近く就蓐。夜、警笛の如きものを聴いて驚いて目覺む。

二十九日 六時起。晴れて寒し。轉居通知を書く。一段落。午前、中市君来る。「定本」重版したき由。高折夫人来訪。午食、味噌すいとん。午后、大工郵便箱を取り付けに来る。勘定を拂ふ。全部にて五十円。他に五円祝儀を與ふ。井の

本君来る。留守居の者依頼。千葉より鐘詰等到来。孝子北白川にゆき夕刻高折氏より贈られたる松茸、大根等を携へて販る。猶郵便局にゆきたるところ、武鑑よりの送金は、百円にあらずして五百円なりし由。不思議に今日は福のある日也。この家如何も吉祥事あるが如し。五時過錢湯にゆきたるも混雑甚し。晩食遅く八時頃。松茸、芋、唐辛子等の精進場。十時頃就寢。

【三十日】七時起。雨。富山行十一日よりと極める。午前、昨夜壞したる眼鏡を直しに眼鏡屋に寄りたる后、住友、安田の両銀行にゆく。教映に寄りたるも山崎君またしても不在。理髪の後川田氏を訪ふ。富山ゆきの件依頼。團子を馳走になり抹茶三碗。新婚の姪坂田氏夫妻に會ふ。三時過飯宅。留守に高折氏よりスープ、干鮎等届け来る。秋田屋の使も来る。歌の依頼。夕刻橋彌君来り、高島の叔母今曉逝去の由を傳ふ。晩食、スープ、ひじき等。夜、東大寺の執金剛神のことを調ぶ。八時過就寢。今日途上邂逅せるものに細井、宮内の両氏あり。

- * 1 北白川……京都市左京区北白川東葛町。
- * 2 有隣館……中国古美術の収集で知られる私立美術館。実業家藤井善助（一八七三〜一九四三）が大正十五年に設立。
- * 3 秋田屋……学術総合誌「學海」を刊行していた出版社。左京区北白川追分町に編集部があり、創刊以来勇も何度か同誌に歌を寄稿している。
- * 4 井ノ本……井ノ本勇象（一八七〇〜一九二〇）歌人。歌集に『現』『微光』。

- * 5 谷崎潤一郎君……玄冬居への最初の来訪者は旧友谷崎。当時、武庫郡魚崎町（現神戸市東灘区魚崎）に在住。
- * 6 細井氏……細井照道（一八七三〜一九八三）知恩院の塔頭良正院住職。八尾への疎開に際し、勇は良正院に荷物を託す。
- * 7 高島の叔母……叔父高島友武の妻多嘉（元陸軍大臣・子爵高島頼之助長女）。

【岡崎円勝寺町への転居】

吉井勇が孝子夫人とともに高知市築屋敷を引き払い、洛北白川の「相聞居」に移り住んだのは、昭和十三年十月のことであった。前夫人徳子の関係した昭和八年の「不良華族事件」以来、五年に及ぶ流離の時代はここに終わる。勇が第二の人生の出発点として京洛の地を選んだのは、「かくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる」をはじめとする『祇園歌集』の歌により盛名を得た縁もあつてのことであろう。この洛北時代に、勇は『天彦』『風雪』『遠天』『わが歌日記』『朝影』『霹靂』『旅塵』『玄冬』の八つの歌集と、『洛北随筆』『雷』『相聞居随筆』『歌境心境』の四つの随筆集を刊行している。五十代の大半を過ごした相聞居での六年余は、生活も安定し、勇にとつて実りの多い期間であった。相聞居からの移転を決めたころの心情を詠んだ次の歌がある。

われもまた秋風びととなりけり京のわび居もすでに
なな七年
 岡崎円勝寺町へ移ることを決めた経緯は判然としないが、その理由の一つとして、岡崎は北白川に比べ市街地に近く、

交通の便もよいことが挙げられよう。新居は疏水に面し、平安神宮にも近い場所であった。家主は有隣館の藤井氏である。

転居して早々、勇はかねてより郷土文化誌「高志」主宰の翁久允（一八八〇—一九七三）から誘いのあつた富山行きを決めている。前年七月、富山市大川寺公園に川田順の「鷲の歌」を刻んだ歌碑が建立されており、順を介して勇にも招聘の打診があつた。九月二十三日付の翁久允宛書簡に勇は次のように記している（翁久允財団所蔵）。

富山ゆきの話川田君から拜承、今考慮中ですが多分ゆきます。何分廿日に移轉したばかりでこた／＼してゐますから詳しくは次便で申し上げます。廿三日朝。

昭和十九年十月

一日 六時起。曇。一日のことなれば例に依り平安神宮に参拜。八時頃家を出で、先づ伏見の高島家を弔問。棺前に柩を捧げたる后辞去。桃山にて奈良電に乗換十時過奈良着。直ちに前川君を訪ふ。伊賀上野の菊山氏座に在り。豆腐、アスパラガス、五目ずしの饗を受けたる后、共に観音院に上司氏を訪ふ。天霽れて漸く暑し。中村、岸本、近江氏と會し共に三月堂拜觀。今日一日開扉の秘佛執金剛神を見る。忿怒の相人に迫るが如し。四時頃辞去。馬酔木の森を過ぎ

て高畑に中村氏を訪ふ。夫人はもと太白社にゐたる人也。蕨餅等を馳走になり福田やといへる家にて晩食。鶏のすき焼、酒、白き飯等にて近來になき豪華版。桃山乗換にて九時過飯宅。留守に初瀬川君来れる由にて轉居祝としてウヰスキーを貰ふ。信州より林檎も到来。十時過就寐。

二日 七時起。晴。葉書など書く。午前、午ちかく谷崎君来訪。共に平安神宮にゆき神苑を歩く。飯りて午食代りのさうめんを食ふ。午后、三時頃まで谷崎君と語る。夕刻、岡田孤煙君の使として後藤君来る。詠草持参。晩食、谷崎君より貰へる牛肉、茄子浸し、茄子味噌汁等。夜、「蜀山人」を読む。八時過就寝。月明。夜半夢精す。愚息の粗忽恐縮なりと雖、猶精気の衰へざるを知るべし。

七日 夜半より雨来る。六時半起。歌をつくる。「樞原神宮」数首。午前、川田氏を訪ふ。翁氏より来信あり、予の来遊を待ちある由。雑談俗談二時間。十二時頃飯宅。雨降りしきりて秋霖の如し。下村氏に筆寫を頼むべく鉄幹の詩を選む。午食、天麩羅うどん。午后、駅前ほとやに下村君を訪ひ切符と筆耕を依頼。三菱に森君を訪ひたる后井ノ本君の家へ寄りて飯宅。鉄幹の詩の選を了す。雨終日降り止まず。晩食、鮭、南瓜等。夜、荷風の「つゆのあとさき」を読む。九時就寝。

八日 六時半起。猶雨。揮毫の支度。午前、揮毫。懐紙十二。茶掛の紙を切る。高山君来訪。画壇の話などを聴く。米澤に飯農する由。午食、ホットケーキ。午頃漸く霽れ、午后より日射縁を照らし来る。揮毫、紙本縦幅十三点。夕刻ま

でかゝる。馬場氏より使。依頼しありたる酒、魚等届け来る。六時頃銭湯にゆく。揮毫にてひどく疲る。漸く老年になりたるためか。晩食、今日は予の誕生日なれば食卓を座敷に移し祝酒を酌む。鮎煮びたし、南瓜、松茸玉子汁。赤飯。食後にゆで小豆等。酔心地夢見心地ともによし。

十一日 午前四時起。六時前孝子同伴家を出づ。味爽風冷たし。七時卅九分京都発の列車にて富山に向ふ。混雑甚しく福井まで座席を得ず。鞆に腰掛けて弁當を食ふ。松茸めし。福井より漸く座して四時半頃富山に着す。途中旧知の沙門〔空白〕君、及び出迎への黒坂君に會す。駅頭翁、藻谷の諸氏に迎へられて芳醇富士吟醸元金井氏邸に入る。入浴の後晩餐會。會するもの主人の金井氏はじめ翁、藻谷、小又、谷本、寺田、宇野、黒坂の諸氏。鮎、鯛等佳肴多く、思はず酒量を過ぎて前後不覚。九時頃酔倒して尊に入る。

十二日 七時頃目覚む。午前、翁、藻谷、小又氏等同乗、縣廳の自動車にて〔大川〕寺公園にゆき川田君の鶯の歌碑を見たる後、常願寺川の断橋を渡りて雄山神社に詣づ。歌碑の石工に慰労品授與のことなどありし后先着の谷本黒坂氏等も同乗電気ビルに至る。この日遂に立山を見ず。遺憾この上なし。電気ビル食堂にて午食。北陸配電の山田社長と同席。海老フライ、鮎等。午后二時より櫻木荘（蓮沼安太郎氏邸）にて座談會。會するもの六十数名。頗る盛會也。花野、大石、大坪の諸氏に會ふ。五時過散會。更に歩いて洲崎に至り歓迎會に臨む。前記の諸氏の外に八尾の川崎博士等も加はり豪興湧くが如し。九時頃金井邸に飯り牡丹餅

を食したる后就尊。

十三日 七時起。午前、金井氏の家族等と寫眞を撮したる后揮毫。金井氏へ謝禮の懷紙三幅をはじめとして短冊、画帖、画賛等二十数点。十一時近く漸く了り、急ぎ午食を食す。まぐろの刺身等珍味多し。一酌。高志神社に寄りたる后驛に向ふ。十二時四分富山発の列車にて金井、翁、藻谷氏等に見送られて飯途につく。旗亭海老亭主人、村、君同行。森本驛より大石博士行に加はる。動橋下車山代出蔵屋にゆきたるも既に廃業の后にて如何ともし難し。大野屋より山中吉野屋に電話をかけ、驛に近き保健所に小憩の后山中に向ふ。六時頃山中着、吉野屋に投ず。入浴の後晩食。鮎の刺身、松茸フライ等。料理番村君の弟子にて蓮根の胡麻あへなどを添ふ。酒三本、麥酒一本。更に一浴して十時頃就寐。雨聲しきりに聴こゆ。

十四日 目覚むれば晴。七時起きて入浴。午前、九時頃宿を辞し、九谷焼の土産物などを買ひて驛頭に至る。鮮女の飴を賣るものあり。十時過の電車にて大聖寺に向ふ。十一時の列車に乗らむとしたるも指定列車にて乗れず。駅前附加納屋といへる家にて午食、小鯛煮魚、鱒と葱のぬた。案外うまし。十二時四十分大聖寺発の列車に乗り、米原にて乗換へたる后七時四十分京到着。電車にて九時過家に飯る。井の本君の家に寄り留守居の勞を謝す。晩食十時に近し。鱒の罐詰、松茸バター焼、全汁等。冷酒一杯半。京の寒気堪ふべからず。十二時近く纔うじて寐に就くを得たり。夜半奇夢を見る。留守に半田蓼井来れるものの如し。

十五日 七時過起。午前、昨夜一泊せる村君を伴ひて川田君

を訪ふ。十一時頃飯宅。下村君より便来り原稿紙を渡す。午食、あり合せ。午后、川田氏村君とともに来訪。共に有隣館にゆき支那の佛像繪画を見る。藤井(守一)、吉川、小川、津田君等に會ふ。飯途川田君再び来り、少時閑談。奈良の所君柿を携へて来る。女子師範に於ける歌會の相談也。井の本君鍵を失ひたることを詫びに来る。旅中の日記を書く。松本の丸山氏より玉葱等送り来る。晩食、ひじき、茄子から揚、かす汁等。夜、村君飯国。富山の風邪薬を飲みて八時過就蓐。

〔二十二日〕六時起。昨夜来寒気募る。歌を作る。「壺法師」
「奈良の時雨」数首。敵比島の一部に上陸を開始す。晴れたれど寒し。午前、高折病院にゆき血液型を見てもらふ。^{*1} B型也。博士自ら淹れたる紅茶一椀。十二時過飯宅したるところ緑風君藤田勇君と共に来り松風園にて待ちあふる由。直ちにゆきて午食を共にす。鶏のスキ焼。弘田君麥酒を齎らして来り一飲。飯途弘田君を訪ひ塩竈にて煎茶を酌む。時局談を聴きて五時頃飯宅。留守に里見、児島、近江の諸氏来訪。近江君より移轉祝をもらふ。晩食遅く七時過ぎ。松茸、玉葱バタ焼、かす汁、鮭うま煮等。ウキスキー小酌。九時過眠。

〔二十三日〕六時半起。上圍時出血中量。歌をつくる。「戒壇院」数首。手紙を書く。午前、理髪にゆき初瀬川君に電話。半晴半曇にして寒し。揮毫、初瀬川君依頼の歌幅。山崎君来訪。教映のその後の状態を聴く。「牧水」を貰ふ。今西君来る。「軍事厚生」の歌稿持参。午食、あり合せ。午后、

下村君来る。鉄幹詩選の筆寫成る。百九十余枚。六十五円禮金として渡す。揮毫のつづき。歌幅十七枚を得たり。出来わるし。午后より晴れて温。孝子辻長にゆきウキスキー二本を得て飯る。更に北白川へ麥酒を取りにゆく。これも二本。「高志」に送るべく「立山遠望」十首清書。五時半頃武徳湯にゆく。晩食、松茸めし、高野豆腐等。日本酒二合、麥酒一本、九時前就蓐。よく眠る。

* 1 前川……前川佐美雄(一九三〇) 歌人。奈良在住。

* 2 菊山氏……菊山當年男(一八四〇) 陶芸家・歌人。

* 3 上司氏……上司海雲(一九〇七) 東大寺塔頭觀音院住職。

* 4 翁氏より来信あり……久允からの手紙に対して、勇は十月八日付で次のように返信している(翁久允財団所蔵)。
御葉書二通拜見。いろいろ御配慮有難う存じます。十一日には午后四時半頃そちらに着く列車でまゐる予定にしてゐます。荊妻も同行しますのでいろいろ御世話になることと存じます。何卒よろしく御願ひ致します。余はいづれお目にかゝりまして。八日朝。

* 5 黒坂君……黒坂富治(一九二〇) 作曲家・民謡研究者。富山大学教授。

* 6 藻谷……藻谷銀河(一九〇〇) 歌人、本名六郎。歌集に『仙人掌』。富山大空襲により死亡。

* 7 金井氏……金井久兵衛(一九〇六) 当時、北陸配電副社長。戦後、北陸電力社長、北陸経済連合会会長を歴任。北陸の電力事業において中心的な役割を果たした経済人。

* 8 小又……小又幸井(一九〇〇) 歌人。歌集に『大立山』。

*9 鷺の歌碑……昭和十八年七月に大川寺公園だいせんじに建立。同三十五年、大川町民文化会館前に移設された（同会館は平成三十一年三月に閉館）。

*10 川崎博士……川崎順二（一八四〇～一九六〇）越中八尾の医師。「越中民謡おわら保存会」初代会長。

*11 村君……村安太郎（？～一九五二）富山市の老舗料亭「海老亭」の初代与三郎の長男。

*12 B型也……空襲などで被災した場合に備えて、当時は住所氏名、所属、血液型を記した名札を衣服に縫いつけた。勇が血液型の検査をしたのも万一に備えてであろう。

【富山・北陸行】

昭和十九年十月八日、勇は新居で誕生日を迎える。満年齢で五十八歳（数えて五十九歳）だが、その精気のいまだ衰えていないことは、二日の後段の記述からもうかがわれる。おおらかなユーモアを湛えたこのような表現は、他の文人の日記ではまずみられないものだろう。

勇夫妻は十一日から十四日まで、三泊四日の旅程で富山・北陸を訪れている。以前に黒部の宇奈月温泉などには泊ったことのある勇だが、富山市内は初めてであった。

勇の来富にあわせ、翁久允は十二日の午後「高志人研究会」において、文化人を囲むでの第六回座談会を開催している（於櫻木荘）。会の様子は、藻谷銀河の「相聞居伯を迎送して」（「高志」第一巻第六号、昭和19・11）などから知ることができる。

歌話会は五六十名を算する多人数で、凡そ三時間に亘り、

伯と来会者との一問一答が続けられた。就中、啄木、白秋等と共に鉄幹門下に参じた思ひ出や、『スバル』の編輯をやはり啄木、平野万里との三人交互に引受けた話。

（略）そして又ふしぎにも当時アメリカに漂浪中の翁々ならぬ翁久允美少年が向ふの本屋で、『酒ほがひ』を」手に入れた事どもは、いたく会衆の興味を惹いたらしくかつた。

座談会は盛会で、翁によると思われる「高志往来」（「高志」第一巻第七号、昭和19・12）にも、「常に周囲の論談を微笑と共にきき、その中から自分の感想をひき出すと言つた態度で全体としてのんびりした気もちをおくる座談会であつた」と感想が記されている。

この座談会、そしてその後の歓迎会で、勇は八尾の医師川崎順二に初めて出会う。川崎は地元の有志とともに「越中民謡おわら保存会」を立ち上げ、勇の友人小杉放菴ら文人を八尾に招いて新作おわらの作詞を依頼するなど、おわら民謡の普及に取り組んでいた。「豪興湧くが如し」の一節に、二人の意気投合した様子がうかがわれよう。十月の富山行きでは勇は八尾を訪れていないが、この出合いが、後に疎開先として八尾を選ぶ一因となった。

座談会に先立って、勇は大川寺公園に前年七月に建立された川田順の「鷺の歌」（山空をひとすぢに行く大鷺の翼の張りの澄みも澄みたる）を刻んだ歌碑を見に行っている。昭和十年の立山登山の折に詠んだ順の「立山行」五十四首は、歌集『鷺』（昭和15・6）の巻頭に置かれ、順を代表する歌とされる。「立山行」には次のような歌がある。

立山うしろたてやまが後立山うしろたてやまに影うつす夕日の時の大きしづかさ

立山きに棲むとは聞きし大鷲まなかくひの目交まなかくひにして飛び立つを見

勇も富山行きの前に、川田順から立山の壮麗な眺めについてくり返し聞かされていたであろう。だが、勇の富山滞在中、密雲に蔽われて立山は一度も雄姿を見せることはなかった。「高志」第一巻第六号に寄稿した「立山遠望」十首には、「遠く立山を雲中に望みて詠みける歌」の詞書きが附されている。

雲の中に隠れてもなほ迫り来る立山の持つ大き厳しきわれ来ぬとおほけなければど立山の雄山おとやまの神にもものも申さむ

またも訪まふよすがに問はむ山荒れて立山おろし吹くは何時いつごろ

昭和十九年十一月

一日 六時起。快晴。歌をつくる。「木賊*1の庭」数首。朝、平安神宮に詣でて祈願。午前、八時半家を出で桃山乗換の電車にて郡山までゆき、更に汽車にて法隆寺にゆく。境内の茶店にて持参のパンを食し午食に代ふ。大宝蔵殿にて佛像、厨子等を見たる后夢殿にゆき、折柄開扉中の秘佛救世観音を見る。深秘感深きものあり。法輪寺にゆき井上師を訪ひ、柿芋などの饗にあづかる。同師はしきりに五重塔焼

失のことを何かに書いてもらひたき様子。その反響に依りて勧進を得むとするところ、蓋し一種の俗僧ならん歟。ふかし芋を土産に貰ひて販る。販途は法隆寺より平端辻ガソリン車、それより電車にて六時販宅。武徳湯にゆきたるに今日より湯銭また上りて十二銭となる。晩食、もやし葛煮、干魚、かす汁。京風味一酌。九時頃就寝。この夜も月明。

二日 七時前起。曇。昨日午后東京上空に敵機B 29現はれたる由。當地も又警戒の要あり。朝歌を作る。「救世観音」数首。午前、南禅寺畔清浪亭に藤田君を訪ふ。往時政界の裏面談を聴く。ウキスキー入り紅茶、抹茶等馳走になる。販途井の本君を訪ひたるも不在。午食代りにふかし芋数片。午后、臥讀。「幕末外交秘史」讀了。甲斐莊君よりの使ひに松園の「祇園會」を渡す。表装の為也。夕刻より雨降り出づ。煙草の隣組配給いろいろ面倒なる如し。予が家は一日三本。伯方島の大沢翁より干魚、雑魚、干海老等届く。晩食、ひじき、焼唐辛子等。京風味小酌。八時過床に入る。北條君の「風雪二十年」を讀む。

七日 七時前起。今日午前八時より十二時迄防空訓練ありとのことなれど孝子担任。七時過金窪*2氏来訪。共に大和路の寺めぐりにゆく。京阪を桃山にて奈良電に乗換へ九時半頃の京下車。めづらしき秋晴の日を薬師寺にゆく。金堂、東院堂、佛足堂を見る。直ぐに近くの唐招提寺にゆく。円柱の並べる建築おもしろし。これより奈良ホテルにゆきたるも外来者に食事を供せず。止むなく露台にて金窪氏携ふるところの林檎、粉ミルクなどにて食事に代ふ。午后、ホ

テルを出で轉害門より佐保路をゆく。聖武、光明の佐保山陵、平城宮趾、法華寺等を見たる后西大寺より往路と同じ経路にて五時頃飯宅。歩行三里位にてかなり疲る。金窪氏と共に晩食、芋、大根のおでん、蟹馬鈴薯サラダ、芋天ぷら、玉子汁等。ウキスキー焼酎の混成酒を飲みみや酔ふ。九時半頃就寢。金窪氏泊る。今日留守に創元社の矢部、堂本寒星の両氏来訪。防空訓練も形式だけのものなりし由。

十八日 八時頃起。晴れたれど寒ゆるまず。「名歌選」の原稿を少し書く。障子の切り張り。午前、手紙を書く。「日立産報」の歌の選を了す。森君より使、芋、銀杏を貰ふ。短冊を渡す。午食、ふかし芋。午后、一時過千葉の父町田同伴にて来訪。思ひの外元氣なるに安堵す。鐘詰その他いろいろ土産を貰ふ。孝子案内して目貫屋にゆき、予は鳩やに下村君を訪ひて飯りの切符を頼む。四時頃飯宅、武徳湯にゆく。体重を量りたるに十六貫二百。歌をつくる。中部日本のために作りし歌に増補して「日立産報」へ「神風特攻隊」五首。晩食、つぐみ、鯖、鉄火味噌、大根煮付等。ウキスキー小酌。八時過就寢。

二十日 七時半起。今日も晴。「名歌選」の稿を次ぐ。午前、孝子父のところへゆき予一人留守居。大阪新聞の林氏来訪談話を求められたれど断る。放送局の笠原氏来りラヂオを直してくれる。二月ぶりにて放送を聴取。午食、握りめし、味噌等。午后、祇王寺の茶會欠席。家の前にて大庭氏に會ふ。日立の華生氏来訪。短冊の依頼と謝禮持参。鳩や下村

君より使ひ来る。切符と麥酒持参。久保氏来り揮毫の依頼。何やかや落ちつかず一日を過す。夕刻国松父町田を伴ひて孝子飯り来る。共に瓢亭にゆきて晩食。鮎刺身、鯉あめ煮、鯛めん等。ウキスキー一酌。途中父等と別れ八時過飯宅。ラヂオにて相模太郎の「灰神楽道中」を聴きたる后九時就寢。

廿一日 六時半起。今日もどうやら晴。かかる天候京にてはめづらし。午前、「名歌選」の原稿を書く。孝子父を見送りに弁當を携へてゆく。手紙を書く。孝子十一時頃飯宅。父無事に座席を得たる由。午食、握り飯。午后、川田氏を訪ひたるも不在。中川にて理髪、大觀堂に寄りて飯る。夕刻関西画廊の竹田君来る。手づくねの茶碗を所望せられたれど断る。雨降り出で時ならぬ雷鳴あり。武徳湯にゆく。晩食、うで玉子、鮭鐘詰、配給の天ぷら等。麥酒一本づつ。八時過寐。吉夢を見る。

* 1 「木賊の庭」……「學海」第二巻第一号（昭和20・1）に七首掲載。歌集『寒行』「玄冬居愚草」の巻頭吟。
移り来て木賊の庭のわびしさに今朝も寒けく噓りにけりはな

* 2 金窪氏……友人の金窪安三。

* 3 千葉の父……孝子の父、国松喜三郎（？）（一五四五）。

【B 29の飛来・千葉の義父の来訪】

十一月一日午後一時過ぎ、マリアナ諸島の基地から発したB 29一機が東京上空に初めて飛来、偵察飛行を行った。以来十回の偵察の後、同月二十四日に大編隊による本格的

な本土空襲が開始される。

戦況に暗い翳が差す中、勇は『短歌風土記 大和の巻一』の歌を詠むために奈良を訪れ、法隆寺（夢殿）、葉師寺、唐招提寺、法華寺などを廻っている。

中旬、千葉の義父国松喜三郎が来遊。義父は勇と三つ違いの六十二歳。翌年六月二十九日、終戦を見ることなく亡くなる（享年六十三）。

昭和十九年十二月

七日 四時頃目覚め床中歌をつくる。七時半起。歌を清書。

「東光」のために「寒菊抄」十首。「神州護持」補遺して十首。晴れたれど寒し。上園時出血少量。午前、若井生来る。福神漬（酒悦）唐がらし（仲店）を貰ふ。短冊一枚返禮。東京の空襲談を聴く。武者小路氏一家爆死の由。哀悼に堪へず。被害の実状案外軽微なるが如し。干柿にて抹茶二椀。朝食と午食とをかねて十二時過雑炊を食す。午后、曇り来りて寒さ加はる。今日より置炬燵を出す。一時半頃かなりの強震あり。用水の水溢れ、壁土落つ。街路に避難。五日の東京新聞に武者氏の一文発見。爆死は流言か。「名歌選」の原稿を書く。晩食、天ぷらおろし煮。夜、ラジオは大垣以東汽車不通を報ず。名古屋あたり震源地ならんか。「八雲」を読む。八時半頃就寝。

十七日 風邪よろしからず。体温を量りたるに三十七度三分。

終日臥床せむと思ひたる爐の方温ければ起きて讀書。孝子は本庄氏のところへゆく。午后、住田君高濱年尾氏の令嬢、即ち虚子翁の孫を伴ひて来訪。顔見世にゆく由にて一時半頃去る。年内に酒二本届ける由。「名歌選」の本稿少し書く。三十三頁迄了。夕刻の体温三十七度。晩食、ひじきするめうま煮、菊菜浸し、芋スウキートポテトもどき。麥酒一本づつ飲む。「出世作全集」を読む。「句楽の死」當時をおもひて感慨深し。九時頃就寝。今日は晴。*

「右欄外」*歌を作る。「高志に寄す」七首。「高志」へ送る。録一首「立山はすでに白きや高志人の翁の大人のしら髪の如」

十八日 八時起。風気猶去らず。体温三六度七分。平熱よりやや高し。寒くして用水に薄氷張る。午前、十時過警戒警報、間もなく解除。午食、パン二片。午后再び警戒警報出で間もなく空襲警報となる。防空壕に入りて退避。三時過ぎ解除となる。ラジオの発表に依れば、敵機七十機ほど名古屋を爆撃、京阪方面には投弾せずに退去せる由。今日は終日防空服装にて無為。四時頃、市文化課の市民歌予選原稿を届け来る。晩食、蕪味噌汁、鯉節。夜、市民歌の採点。選に入るべき作殆んどなし。「名歌選」の本稿を少し書く。三十七頁迄了。はじめて大蒜（にんにく）を焼きて食ふ。風邪葉なりとぞ。身体温まりてよし。九時過就寝。

十九日 夜半二時頃警戒警報。起きて待機したるも間もなく解除。シャツのまま就寝。七時半起。今日より防空服装にて起居することにする。晴れて寒。新聞に依れば敵機昨日

は洛北の山上を過ぎたる由。ああ、京洛遂に敵機を見むとは。午前、市民歌の選を再開、点頗る甘きが如し。手紙を書く。郵便局にゆく。午食、パン三片。飯一杯。午后、「名歌選」の本稿をつづく。四十三頁了。体温下りて三十六度四分。今日は凶らずも聴きたる言葉に依りて捨身の思再び起れり。晩食、湯葉清汁、高野豆腐、等。ウキスキー、三級酒小酌。夜に入りて中村君日本酒一本を届けくる。感謝に不堪。夜、ラヂオに依れば昨日の敵機撃墜十七、撃破廿機以上の由。いささか溜飲を下ぐ。九時頃就寢。

廿二日 八時起。半晴にして寒し。屋上霜を見る。午前、松竹の菱田君来訪。白井會長よりの使にて舞踊劇の注文。「離助狂乱」といへるものにて趣向の大体を聴く。大阪新聞の林君来る。歌を渡す。良正院に細井氏を訪ひたるも不在。住友銀行に寄りたる后襟善に亀井氏を訪ひ用談。玉葱を貰ふ。出づれば忽ち警戒警報。急遽帰宅。一時前空襲警報。むすびを食し防空壕に入る。退避数回。南方の空に敵機の飛行雲を見る。四時近く警報解除。五時より岡崎つるやの養徳社の顧問招待會にゆく。新村、湯川、梅原、吉川、高田、川田の諸氏の外、松井、大久保、中市、矢倉君等。小鳥、鶏、茶碗むし等。小酔。菓子を生産に貰ひて八時半帰宅。九時頃就寢すると間もなく住田君来訪。酒二本持参。貰ひたる饅頭にて抹茶を饗したる后閑談。住田君泊る。十一時近く再就寢。

卅一日 七時過起。いよいよ五十九歳の最後の日なり。午前、

「名歌選」の本稿を書く。市文化課より使あり。市民歌の選の謝禮持参。片山氏より使、舞踊劇の本を届け来る。孝子は白川へゆく。午食、あり合せ。午后、「名歌選」の稿をつぎ、兎に角出来たる分だけを纏めて渡すことにす。百三頁了。これより後は来年改めて執筆すべし。松竹の菱田君玄関達見ゆ。来月五日頃渡すことに延期して貰ふ。曇りて寒く、何となく気疲れをおぼゆ。四時頃美術館に河村君を訪れたるも休み。武徳湯にゆきたるにその混雑言語道断。湯のぬるきこと日向水のごとし。夕刻馬場氏より酒を届け来る。漸く歳暮匆忙の感あり。黒瀬、武鐘両氏の詠草の添削を済ます。晩食、うどん南蛮。小酌。夜、九時頃就寢。かくて静かにわが五十九歳の年は終りぬ。来ん年は更に勇猛精進を期せん。

* 1 若井生……若井信男（一八九〇？）。新派の役者。喜多村緑郎門下の女方。文学好きで知られ、草創期の日本映画にも数多く出演。

* 2 強震……昭和東南海地震。熊野灘を震源とするM7・9のプレート境界型巨大地震。終戦前後の四大地震の一つ。東海地方に甚大な被害をもたらしたが、戦時下であったため実態は隠蔽された。

* 3 「高志に寄す」七首……雑誌「高志」第二巻第二号（昭和20・2）所載。

* 4 敵機七十機ほど名古屋を爆撃……十二月十八日の午後、マリアナ基地を発したB29六十三機が名古屋に来襲。爆撃目標は名古屋市内の三菱重工業の機体工場であった。

*5 養徳社……戦争末期の出版統合の下、甲鳥書林の中市弘・矢倉年が奈良の天理時報社を受け皿として昭和十九年に立ち上げた出版社。顧問として名を列ねているのは、新村出、湯川秀樹、梅原龍三郎、吉川幸次郎、高田保馬、川田順等いずれも在京の文化人。

【本土爆撃の開始】

B 29の大編隊による本土爆撃は、十一月二十四日午後東京来襲に始まり、同月二十九日夜半から翌日未明にかけて東京市街地への焼夷弾による初の夜間爆撃、十二月十三日には名古屋への初空襲と続いた。同月十八日にも名古屋に爆撃、B 29は関西圏もうかがう飛行を行い、十九日の勇の日記には「ああ、京洛遂に敵機を見むとは。」の歎声が記されている。昭和十九年末、状況は一変し、十八日からは勇も防空服を身につけ、空襲警報が出ると防空壕へ退避する日々となった。

こうした中、十二月九日には富山の藻谷銀河より「熊丸」（熊の胆）が送られて来る。その返礼をかねて、最初の「高志歌」となる「高志に寄す」七首を詠んで「高志」に寄稿している。

高志びとの送り來したる熊の膽を嘸みて國思ふ歌はつ
くらむ
高志を戀ふ心ほのかに湧く夜半は銀河の醉寐おもほゆるかも

昭和二十年一月

一日 八時起。晴れて静かなる元旦。祝膳に向ひたる后十二時近く孝子と共に平安神宮に詣で祈願。神苑を拜観して販宅。途上、水谷川、藤田勇、中市君等に會ふ。午后、「定本」の校正。「名歌選」の原稿の整理等。桑野氏より来状。旧臘の五百金は歌集に対する謝禮の由。井の本君年禮に見ゆ。炬燵に招じ祝酒一献。工員等の内状を聴く。矢倉君の詠草に加朱。晩食、喰積にて小酌。夜、ラヂオにて伯鶴の講談、首相の年頭辞、羽左衛門、幸四郎等の「勸進帳」を聴く。九時頃就寢。夜半目覚め、再び眠る。

十三日 今暁四時頃地震ありて目覚む。先日次ぐところの強震にして余震頻々たり。折も折とてかく屢地の震ふは、何ものか天意に背くものあらざるなき乎。憂慮に堪へず。再寐して八時起。めづらしく氷張らざれど寒し。「軍事厚生」の選を了る。午前、美術館に河村氏を訪ひナツメを返す。糊を貰ふ。午食、ホットケーキ。午后、「名歌選」の續稿を書く。一時半頃警戒警報発令。二時四十分頃解除。敵三機ほど偵察に来れるものの如し。葉舟の「明治文学の潮流」を読む。乾燥無味。半讀して止む。多く炬燵に在りて讀書。訪客なし。晩食、味噌漬焼豚、とろろ芋。夜、無為。九時頃就寢。

十六日 床中歌をつくる。八時起。上圍時いまだ排便せざる

に出血。即ち止む。「厚生文化」へ「濠中吟」七首。朝早く大阪新聞の林君来る。歌稿を渡す。今日は晴れたれど寒さ甚しく手水鉢等皆氷れり。時計を間違へ、朝食を食したれば忽ち十二時。午食として餅二個。午后、「名歌選」に昭憲皇太后の御歌を加ふ。郵便局にゆき藻谷君に熊丸の代金(二〇)を送る。夕刻、武徳湯にゆく。めづらしく混雑せず、湯加減も可也。晩食、カレーライス。酒小量、ウヰスキー一杯。夜、森銑三の「書物と人物」を読む。九時前就寢。一睡したりと思ふ間もなく轟然たる爆裂音に目覚む。まさに投弾とおもふと同時に飛行機の爆音。五分ほどして警戒警報。情報は傳へて曰く、敵機京都の北方に在り、轉じて名古屋に向ふと。果して今のは何ものをか投下せるものなるべし。やがて警報解除。催眠薬を嚙みて再寐。時に十一時五十分。

十七日 思はず寐過して目覚むれば九時に近し。晴れたれど酷寒。川田氏より来状。左記の切抜同封。

「寸心録」(五九) 川田順

昨年末「細川幽齋」と題する評傳を脱稿して創元社に渡したが、この研究のため、僕は幽齋の肖像畫を二種見たのであった。(略)「友人の誰かに似てゐる」と思つたら、それは吉井勇大人であつた。大人と僕とは共に東京育ちの京都隱棲で、無二の詞友、しきりに往來してゐる。「酒ほがひ」「祇園歌集」の才人は「天彦」「玄冬」の歌者と老いて、悠揚、重厚、大樹の如く仰がれる。歌は幽齋よりも上手だ。けれども幽齋は六藝の達者で、武道や學識は申

す迄もなく、能を舞ふ、太鼓を打つ、茶を點てる、刀劍を相ずる、庖丁の腕前も冴えてゐた。吉井大人、文學以外には?。能有る鷹の爪を隠す乎。近來彩管を弄び、又、時として茶碗をひねるとも聞く。京童の浮説か、知らず。

予は之を讀みて余技よりも自らの無学なるに慚愧を覚ゆ。せめて歌学なりとも改めて修すべしと考ふ。今朝の来状は更に又三遊亭円馬の訃を傳へ来る。晩年の薄倖彼の如きは尠なからざるべし。哀悼の歌を作らむと思ふ。午前、養徳社の使来る。「名歌選」の追補原稿を渡す。午食止む。午後、手紙を書く。岸本水府来る。昨夜の爆音と同時に煙硝の匂ひを嗅ぎたりといふ。或ひは北白川あたりか。短冊など貰ふ。古短冊の目利を頼まれたれどよく分らず。上團思はしからず七福を嚙む。聴くところに依れば昨夜の爆撃は五條阪なるよし。いよいよ京洛も修羅の巷か。円馬を悼む歌をつくる。「名歌選」の續稿を書く。晩食、カレーライス。夜、「書物と人物」を読む。今夜より準防空服装にて就眠。九時過床に入る。「大和の神樂歌」讀了。

十八日 七時半起。上團時出血稍多量。朝食前若井生来る。一級酒四合、海舟を貰ふ。本年はじめてなればあり合せにてウヰスキーを小酌。閑談漫談時余。養徳社より使。企画届(定本と名歌選)に捺印。十二時過朝食午食をかねたるを食す。午后、「名歌選」の原稿を書く。松竹の菱田君来る。脚本料持参。聴くところに依れば一昨夜の投弾は九個。死者三十名ほど。爆風のため白井氏宅の窓硝子も壊れたる由。いよいよ戦禍身近に迫るの感あり。今日は晴れたれど

寒くして氷厚し。滋より久しぶりに来信。再び横須賀通信学校に移れる由。夕刻、愛媛の和田生来る。雑魚を貰ひ揮毫を頼まる。「月明」の原稿を托す。今夜より硝子戸等開放することにす。晩食ギスケ煮、うになどにて一酌。鮭入り焼飯。夜、八時頃警戒警報、間もなく解除。一寐するとややありて十二時近く再び警報。

廿二日 八時起。晴れたれど寒し。薄氷。朝早く若井生来る。一級酒持参。揮毫の依頼。雑談種々。爆撃以来芝居の入り屋の部急に悪くなりたる由。井の本君来訪。鶏いよいよ引導を渡すことにする。馬場氏酒持参にて一會催すことを約す。十一時過例に依り朝午兼帯の食事。午后、養徳社の木村君来る。「名歌選」の残稿を渡す。東山あたり疎開する者多しといふ。手紙を書き今後のことなど考ふ。夕刻より曇り来る。晩食、人參うま煮、大根味噌汁、ぎんなん。小酌。疎開すべきや否やについて孝子と語る。九時頃就寢。

廿三日 拂曉四時半頃警戒警報。敵機は一機琵琶湖上まで来り轉じて名古屋方面へ向ふ。五時半解除となり再寐。八時頃起。午前、揮毫。若井生の分了る。午后、二時頃警戒警報。つづいて空襲警報。敵機六七十機、京都上空を通過して名古屋に向ふ。爆弾を投下せる如き音響を聴く。先夜よりも大分遠し。空襲警報中に創元社の矢部君来訪。「短歌風土記」の校正持参。石鹼、バナナ糖などを貰ふ。四時頃警報解除となる。五時半頃河村君に迎へられ市の自動車にて二條城に近き棟居氏を訪ふ。大西氏と四人にて晩食。牛肉、魚のスキ焼。爛酔して前後不覚。河村君に送られて飯

る。何時頃就寢せしやも知らず。×

〔右欄外〕×夜八時頃警戒警報。敵機京都の上空に在りし如きも、酔中既に敵なきがごとし。

廿四日 宿酔、頭重し。十時頃漸く起。河村、井の本来る。若井生うどん持参にて来訪。明日飯京の由。歌幅と短冊を與ふ。終日懶し。熟考の結果疎開と決定。直ちに荷物の件につき知恩院に細井氏を訪ひ、承諾を得たり。富山縣八尾の川崎氏に依頼の速達。飯りて籠居。無為。夕刻井の本君来る。昨夜宇治と三條麩屋町に被弾ありたる由。(細井氏は花園妙心寺あたり煙の上れるのを見たるといふ。)又今西君玄関まで来訪。文学全集の歌俳句篇を貸す。全氏は昨日亀岡の山中に爆弾落ちたりといふ。諸説紛々たり。晩食、若井生のもたらしたるうどん、野菜なべ。小酌。九時過就寢。

〔右欄外〕*八時頃警戒警報。間もなく解除。一機大阪上空より東南に去る。

廿七日 八時起。晴れたれど寒し。上圍時出血多量。午前、本の整理。午食、ホットケーキ。午后、曇りて時々飛雪あり。十二時過警戒警報出づ。今日は数隊編機にて主として伊豆半島より京都を襲へるものの如し。山梨縣へ侵入せるものもありと傳ふ。二時頃解除。警報中藻谷、大石、大坪氏等に部屋借の世話を頼む手紙を書く。早く静かなるところにゆきたし。再び本の整理。川崎氏より逐電あり。「サシアタリヤドヤ」にて辛抱せよとのこと。孝子買物にゆく。万年筆その他を買つて飯る。歌をつくる。円馬を悼む歌「土

鈴のなげき」十首。そのうち五首を「八雲」に寄す。晩食、配給のはもつけ焼、湯豆腐、ぎんなん。これも配給の葡萄酒。夜、ラヂオに依れば、今日は七十機位にて帝都を襲へる由。都内五六カ所より出火せりと。前線へ送る夕の唄、講談などを聴く。九時頃就寝。今夜も警報なし。

廿九日 六時頃目覚め、床中「短歌風土記」の序文を書く。八時半家を出で襟善に亀井氏を訪ひ富山に赴く旨話す。ウキスキー入紅茶一杯。十時頃飯宅して朝食。その後は終日炬燵にあり。本の整理を大体終る。手紙を書く。今日も曇りて寒し。聴くところに依れば一昨日の東京爆撃はかなり激烈にして京橋日本橋辺被害甚しく大谷松竹社長も傷つきたる由。戦局いよいよ苛烈。指導者の虚偽的言辞には憤りを感じしむ。官吏責任を知らず、屠腹に値す。皇国の前途憂ふべきかな。夕刻久しぶりにて塩湯にゆく。混雑益々甚し。晩食、湯豆腐、鱈塩焼。葡萄酒少量。夜、八時前警戒警報出づ。敵機一機紀州より大阪へ出で京都を過ぎて熊野灘に去る。京都府下に投弾。八時半頃解除。砂糖湯を飲みて九時過就寝。

卅一日 夜半二時頃再び警戒警報。敵機一機大阪上空に來れる由。間もなく解除。再寐。八時起。「年譜」を書く。午前、仙心堂來る。整理せる書籍を賣却。全部にて四百八十円也。本を送ることを頼む。九時過警戒警報出でたるも味方機を誤認せるものにて直ちに解除。周章のさま思ひ見るべし。疎開するに如かず。揮毫、棟居、仙心堂、井の本、

湯川、河村君等の分を了る。午食、パン。午后、美術館に河村氏を訪ひ、棟居氏へ揮毫物の傳達を頼みたる后郵便局にゆき電報速達など。直ちに飯宅。留守に矢倉君及び大阪新聞の橋本君見えたる由。今日は晴れて寒ややゆるむ。独ソ戦切迫、伯林へ五十里程にして断末魔近し。左胸部に腫物を生じ快からず。晩食、湯豆腐その他。夜、七時過矢倉氏來る。荷物のことを頼む。快諾。切符も買つてくれる由。全氏より廿七日銀座にて爆撃に會ひ、五間の近距離に直撃弾を受けたる体験談を聴く。戦争の惨禍は酸鼻に値す。為政者の虚偽を憎むの念愈甚し。「空白」時頃就寝すると間もなく警戒警報。敵機三機ほど土佐方面より大阪へ侵入して伊勢路へ脱去。一時間ほどにして解除。催眠剤を嚙みて眠る。危機漸く迫り、憂ふべき正月なりしよ。今年はいかゞなりゆくならん。

〔左欄外〕△聴くところに依れば、京都附近の敵機投弾の場所は、奈良線木津川鉄橋附近と枚方の由。

*1 地震……三河地震。三河湾を震源とするM6・8の直下型地震。終戦前後の四大地震の一つ。

*2 「濠中吟」七首……「厚生文化」は確認できなかったが、「短歌研究」(昭和20・2)に「濠中吟」十首の掲載がある(十首とも歌集・全集には未収録)。

老^おの骨鳴らむばかりの怒り持ち足ずりしつづ^{がう}濠ぬちに居^をる
敵機はや滋賀の縣^{あがた}へ越えぬらし濠より出でて比叡が嶺や
見む

*3 「寸心録」(五九) ……「中外日報」昭和二十年一月十日掲載。川田順の「寸心録」は「中外日報」に百回連載され、戦後『枯草録』(昭和21・7)に所収。

*4 三遊亭円馬…三代目三遊亭円馬(八二〇元五)一月十三日没。上方(大阪)出身の噺家だが、江戸落語も得意とした。上方落語の衰退により高座を失い、晩年は中風を患うなど不遇であった。門下に正岡容がいる。

【東山馬町空襲と八尾疎開の決意】

年が明けると、B29は都市部への集合焼夷弾(ナパーム弾)の投下を開始する。これは空中で破裂して油脂成分の充填された信管に点火しながら落下するもので、町を一面に焼き尽くし、人々の士気をくじくことを狙いとした無差別爆撃であった。

連日のように警戒警報・空襲警報が発令される中、一月十六日の夜半、ついに京都も空襲を受ける。十六日後半の記述、「轟然たる爆裂音に目覚む。まさに投弾とおもふと同時に飛行機の爆音。(略)果して今のは何ものをか投下せるものなるべし。」は、この夜洛東を襲ったB29一機による「東山馬町空襲」の衝撃を生々しく伝えている。

翌十七日の記述、「昨夜の爆音と同時に煙硝の匂ひを嗅ぎたりといふ。或ひは北白川あたりか。」「聴くところに依れば昨夜の爆撃は五條阪なるよし。」からは、情報が錯綜しているさまが見て取れる。十八日の「京都新聞」一面には、「京都も戦場なり」の見出しの下に「一昨夜半B29一機/京都市に侵入、投弾」の報があり、さらに二面には被

爆現場の写真とともに「魔翼遂に京都を侵かす/深更不意打の盲爆」の記事が載っている。岡崎にもほど近い東山への爆撃は、勇を「いよいよ京洛も修羅の巷か。」「いよいよ戦禍身近に迫るの感あり。」と切迫した状況に追い込んでいった。

馬町空襲の一週間後、二十三日にも京都には爆撃があり(船井郡西本梅村・現南丹市)、勇は翌二十四日、ついに富山への疎開を決める。このような経緯から、勇の八尾疎開の直接の契機となったのは「東山馬町空襲」であったと考えてよいだろう。

日記にもあるように、昭和二十年一月二十四日、勇は八尾の川崎順二宛に速達で次のように疎開を依頼している(八尾おわら資料館所蔵)。

前畧。御無沙汰致して居ります。

偕甚突然でございませうが、小生と荊妻と兩人、三四ヶ月間そちらの方へ疎開致したいとおもひますので、ちよつと御相談申上げます。

一、二間位の部屋を借りたきこと。

一、荷物は手廻りの品位しか持つてゆけないとおもひますので、寝具等借りられるやう御世話願ひたきこと。

一、町籍はそちらに移し、食料等そちらでもらへるやうにして頂きたきこと。

大体この位の条件でございませうが、若し適当の部屋見付からぬ時は、當分宿屋にゐてもよろしいとおもひます。今のままでは荊妻神経衰弱になりさうなので、一日も早

くまみりたいたいと存じますから、御手数ながら御返事御打電を願へれば幸ひに存じます。取急ぎ用事のみ申上げました。何卒よろしく御願ひ致します。
廿四日朝

これに対し、川崎順二は二十七日にすぐさま「サシアタリヤドヤ」と返電。翌二十八日に勇が送った「ライゲツ五ヒゴロユクイサイフミヨシイ」の電報が八尾おわら資料館には残る。勇は書籍などを売却整理し、知恩院の良正院に荷物の預かりを依頼している。

ところで巷説に、京都には「空襲がなく戦災被害はなかった」、あるいは米軍が「文化財を守るために爆撃を控えた」（文化財保護説）というものがある。⁷ 東京や大阪、名古屋のように大規模な空襲がなかったためもあるが、占領下に米軍が「良識を持って空襲を避けた」と強調する中で、京都の空襲被害の実態は、戦後長らく明らかにされてこなかった。

被害の本格的な調査が行われたのは、ようやく七十年代に入ってからである。その「京都空襲を記録する会」の調査報告『かくされてきた空襲―京都空襲の体験と記録』⁸と照合すると、勇の一月の日記に記された三回の空襲が、京都への空襲を正確に記録したものであったことがわかる。

一月十六日 東山馬町空襲（死者推定41名）

一月二十三日 宇治市銃撃

西本梅村（現南丹市） 投弾

一月二十九日 上狛町（木津川河原） 投弾

このうち最初の「東山馬町空襲」は、昭和二十年六月二十六日午前の「西陣空襲」（死者推定50名）に次いで京都市内に大きな被害を与えた爆撃である。この空襲では京都女子専門学校（現京都女子大学）の寮などが甚大な被害を受けた。馬町空襲の歴史を風化させてはならないとして、二〇一二年一月に「馬町空襲を語り継ぐ会」が組織され、二〇一四年一月には被災地に「馬町空襲の碑」が建立されている。同会は二〇一八年一月に解散したが、同年に京都女子大学・坂口満宏教授と学生たちによって、貴重な写真資料を掲載した「京都・馬町空襲被害地図」が作成されている。⁹

文学者が馬町空襲について記したものは、現在「洛東日録」の他に確認されていない。被災地から四キロほどの近い場所にいた勇の日記は、当時の同時代的な受けとめ方を知る上で貴重な証言となっている。なお、二〇一八年には、当時神楽町に住んでいた湯川秀樹の昭和二十年の研究室日記が公開されている。湯川の一月十八日の日記にも馬町空襲について次のような記述がある。¹⁰

1月18日（木）

今朝も大変寒い 室内零下三度

硝子窓の氷の結晶は益々鮮かである

16日夜、京都市東山女専へ米機爆弾投下、

京都への投弾はこれが初めてである。

昭和二十年二月

〔二日〕十二時過再び警戒警報出づ。これも一機。四時半頃三度警報。これも又一機。雪霏々。眠りて七時目覚む。直ちに起きて川田氏を訪ふ。例に依りて抹茶二椀。国を憂ひて談おのづから慷慨に落つ。池崎忠孝曰く、伶俐と馬鹿の喧嘩のごとしと。同感。川田氏は万一の場合自決を決意せるもののごとし。高折氏を訪ひ夫妻に會ふ。胸部の腫物を診てもらひたるに疔なりといふ。蕎麥粉、関雪氏短冊などもらふ。吉田神社と大元宮参拜。祈願。電車来らねば歩みて十一時頃飯宅。留守に荷物を矢倉氏方へ届けたる由。朝食を兼ねたるものを食す。午后、高折病院にゆき疔の手當をして貰ふ。ウキスキー入り紅茶一椀。飯れば大阪新聞の婦人記者在り。不愉快なれば大く語らず。仙心堂来り送るべき本を持ちて飯る。短冊二枚を與ふ。残の荷造りなど大体終了。晩食、湯豆腐にて飯二椀。腹部張りたれば上圍して放屁数番。それだけに少量の出血あり。ラヂオにて浪花節、長唄など聴く。ルソン島の戦況益々おもしろからず。九時過寐。

〔三日〕暁四時半頃警戒警報。間もなく解除。そのまま炬燵に在りて起。上圍時猶少量出血。午前、孝子北白川方面にゆく。「年譜」を大体書了。燕や来る。荷物を良正院に運ばす。川村氏来る。井の本君来る。餞別としてハンケチを貰ふ。創元社の矢部君来る。「風土記」の第二巻は加賀、能登、越中にする旨話す。養徳社の木村君来る。餞別持参。

草林君来る。午食、矢部君と共にパン二片を食ふ。午后、揮毫、細井氏、文報、住田氏等の分を了る。矢倉君来る。幅物数点を托し、楯彦の「東方遙拜」を贈る。大庭君、今西君来る。共に短冊を贈る。軍事厚生より餞別持参。中市君玄関迫来る。夕刻、今西君久しぶりに来り瓢亭に誘はれたれど断る。何やかや匆忙たる日なり。昨日の婦人記者は京都新聞にして左の記事出でたり。

*2 大比叡の嶺はさびしかり

吉井氏疎開に寄する川田氏の友情

京の古い歴史と美しい自然に歌材を求め去る昭和十三年岡崎に寓居を構へた歌人吉井勇氏は、この度越中八ツ尾に住む畫家小杉放庵氏や歌友川崎順二博士等の知人に招かれて富山縣婦負郡八ツ尾町に疎開することとなつた、四日早朝疎開先に向ふ同氏は時節柄、知人や友人の送別は固く辞退し、京都を去ることとしたが、同じ歌の道にある親友川田順氏に別れを惜むべく二日朝洛東銀閣寺の同氏宅に最後の訪れをした、苛烈なる時局下の晨、送る者送られる者はしみじみと語りあつたのであるが、歌の友、心の友を送る川田氏はその感慨を次の七首に籠めて本社に寄せた、なほ吉井氏に対しては

「君往なば大比叡の嶺はさびしかり越の冬山よろこばむかも」
の一首を送り残るものの淋しさを比叡の嶺とともにかこつたのである

送吉井勇大人 川田 順

吾が父のけふ五十年の忌の日をたまたま友の別れには来つ

雁がねも歸りいそがぬ春寒に吉井の大人は北へ往くとふ
越へ去る友と對へりしかすがに老をかえりみ涙はかくす
級離る越の田舎に隠りみよいざといふ時の肚はきはめて
いづこにか往なむと思ひし時すぎて古き京にわれはとどま
る

いづことて静かならめや友とわれ國の將來を祈りて別る
門べまで雪ふみて友を送るかもこれや限りと下思ひつつ

腫物のためにや微熱あり。三十六度八分。しかし大丈夫な
るべし。晩食、うなぎ、豆腐野菜ごつた煮。夜、八時頃警
戒警報出づ。敵機一機木津川附近に爆弾を落して熊野灘に
脱去。九時近く解除。七ふくを飲む。間もなく就寢。

〔右欄外〕×高折夫人来訪。鰻蒲焼をもらふ。

〔四日〕午前十二時半頃警戒警報。やはり一機。間もなく解除。
雪ありて月明。再寐。五時過三度警戒警報出づ。大阪上空
より京都を過ぎて脱去。爆音頭上に聴こゆ。そのまま眠ら
ずに起。疔やや排膿。経過よろしきがごとし。午前、理髪
にゆき直ちに飯宅。荷物の片づけ中々抄取らず。矢倉、井
の本、今西、紋太、河村、大西の諸氏来る。紋太は住田氏
の使ひとして蝶、本など持参、荷風の本二冊を托す。午后、
二時頃警戒警報。つづいて空襲警報。敵機九十機ほど神戸
埠頭方面を襲へる由。四時間ほどの后漸く解除。警報下に
ありて漸く荷物全部を良正院に運び了る。近所に挨拶廻り
をしたる后井の本氏を訪ひ、共に良正院にゆきて細井氏に
好意を謝す。歌幅及び郁芳^{あき}猥下の死を悼む歌を届く。井の
本君と三條橋頭にて別れ京都ホテルに投ず。食堂にてまづ

き晩食。夜、矢倉君弁當を携へて来る。持参のブランデー
を飲み握り飯を食す。寒甚し。九時頃警戒警報。解除の後
眠る。

〔五日〕夜半一時及び四時の二回警戒警報出づ。殆んど眠らず。
六時ホテルを出で、矢倉君に見送られて午前七時三十九分
京都発糸魚川行の列車に乗る。車中朝食の弁當を食す。途
中警戒警報出づ。安土迄至りしところ突如汽車不通の旨告
げられて當惑甚し。止むなく下車して雪中にて考慮する多
時。漸く村長に画家伊庭慎吉氏あることを想起し、村役場
に寄りたる后その邸を訪ふ。途上雪を踏んで来る好紳士に
邂逅。多分伊庭氏ならんと思ひ刺を通ずれば果して然り。
そのままその家の爐の間に招ぜられて餅、午食等の饗にあ
づかる。画帖に一首の歌をしるして曰く。「良寛の心月輪
の字の下に村長君を見ることもよし」結局開通するまで京
都へ引かへすことにして辞去。荷物の半は駅前茶店に預
けたるまま伊庭氏に見送られて五時頃の下り列車に乗る。
決死的の混雑にして世相の險悪憂ふるに堪へたり。纒うじ
で京都に飯り、七時頃漸く京都ホテルに入る。幸ひ風呂あ
り。久しぶりにて入浴。弁當を食して漸く眠る。

〔八日〕夜半二時頃と早曉五時頃警戒警報出づ。ともに一機づつ、
概ね四国路より近畿を過ぎて紀州に去る。うるさきこと限
りなし。解除后京都驛にゆきて小西助役に會ひ切符を受取
りてホテルに飯る。食堂にて朝食。豆粕入り焙り飯少量と
珈琲一椀。食糧の欠乏漸く深刻。新聞を見るにマニラの市
街戦激烈を極むと。斬込を得意とする我軍は猶戦国時代の

旧套を脱せず、^{*5}ノンノンズイの修羅場を想起せしむ。慨然たらざるを得ず。午前、二時間パーラーにて時を過したる后顔剃にゆく。販りて食堂にて午食の後孝子と共に高折病院にゆき、孝子にも肺炎予防の注射をしてもらふ。愈々明朝出発することに極め、安土の伊庭氏に電話をかく。天漸く霽れ来れども昨夜の睡眠不足のため頭重し。夕刻矢倉君来訪。猶京都に在るを驚けるもの如し。共に食堂にて晩食。今日は献立少しく変りて魚のバター焼、菓子等あり。夜、矢倉氏より届きたる弁當を食し、日本酒小量を酌む。勘定（一五〇円ほど）をすましたる后就寝。夜一度警報出づ。京都に於ける最後の一夜は寒くしてわびし。

*1 池崎忠孝……評論家・赤木桁平（一八九一〜一九四九）の本名。評論に『遊蕩文学』の撲滅」など。

*2 大比叡の……「京都新聞」昭和二十年二月三日に掲載。

*3 郁芳猯下……^{いくほうずいげん}郁芳隨園（一六七〇〜一九四五）知恩院八一世門跡。一月二十八日没。「猯下」は宗門の管長など高僧への敬称。

*4 伊庭慎吉……画家（一八八五〜一九七五）。住友第二代総理事伊庭貞剛の四男で安土村の村長を務めた。邸宅はヴォーリズによる和洋式木造住宅で、現在は文化財指定（近江八幡市）を受け「旧伊庭家住宅」として一般に公開されている。「良寛」の歌は全集未収録。

*5 ノンノンズイ……講談で、軍勢がわっと押し寄せるさま。夏目漱石『硝子戸の中』（三十五）に二代目田辺南龍の使った言葉として引用がある。

【京都を離れる】
富山八尾への疎開準備を進める中、勇は川田順から次のような書簡を受け取っている（昭和二十年一月三十日川田順書簡、京都学・歴史館所蔵）。

扱本日風聞致候へば貴家富山地方へ御疎開の由御英断結構と存上候。小生は家庭の事情等にて当地離れ難く爆死を覚悟して頑張候外無しと諦め居候。貴家御引越の後の寂しさを考へ居候事に候。

この古き京の空を安からず吉井勇は越へ行くことも
君往なば大比叡の嶺はさびしがり越の立山よろこばむ
かも

二日の川田順訪問は、悲壮な覚悟と惜別の歌を記したこの文に応え、直接別れの挨拶に訪れたのだとみられる。翌三日には、順の「送吉井勇大人」七首と併せて、勇の八尾疎開についての記事が「京都新聞」に掲載されている。

八尾行きに先だつて、勇は一月三十一日に川崎順二宛に速達を送っている（八尾おわら資料館所蔵）。

御手紙拜見。

突然の不しつけなお願ひにもかかはらず快く御世話下さいまして御厚情まことに有難う存じます。八尾文化のためにも出来るだけのことは致したく、さしあたりこれから續刊する「短歌風土記」中の一巻として歌集を一冊出したいたとおもつてゐます。何やかやお目にかかつたうへ

でお話致します。

一日も早くまゐりたいのですが、荷物の片づけに時日を費し結局そちらへは五、六日頃着くことになりさうです。前々日あたり打電致します。

今后いろいろ御世話になることとおもひますが何卒よろしく願ひます。

廿一日朝

おそらく勇夫妻の疎開を八尾に受け入れるにあたって、川崎順二には小杉放菴の「八尾四季」のような新作おわらを期待するところもあったであろう。「八尾文化のために」の一節は、そうした川崎の思いに応える一文である。三日の日記には、「風土記」の第二巻は加賀、能登、越中にする」との記述もあり、大和の巻に次ぐ『短歌風土記』の舞台として北陸路を構想していたこともうかがわれる。

吉井夫妻は当初の予定通り五日の早朝に富山へ向かったが、警戒警報発令の後安土で汽車は不通となり、やむなく京都に引き返す。降りしきる雪とともに、前途の多難を予感させる出来事であった。翌六日の午後、勇は川崎宛に次の電報を送っている（八尾おわら資料館所蔵）。——「キシヤフツウテヒキカエシタカラダモワルク三四ヒオクレルヨシイ」（汽車不通で引き返した 体も悪く三四日遅れる 吉井）

「洛東日録」は、二月八日の「京都に於ける最後の一夜は寒くしてわびし。」の一節で閉じられる。九日からの日記は頁を改め、「北陸日記」としてノートの半ばから始まっている。八尾に疎開し、空襲警報に脅かされる日々から

東の間解放された勇であったが、「疎開して行つた先の越中八尾も、また安住の地ではなかった」（『私の履歴書』）と後年記している。越中八尾での疎開時代の詳細については、「北陸日記」「續北陸日記」の翻刻・解題を参照されたい。

【註】

〔1〕平成九年五月に勇の長男・滋氏より寄贈された資料。

〔2〕歌集『寒行』『玄冬居愚草』の章の詞書には次のようにある。

昭和十九年九月、われは茅廬を北白川より岡崎へ移しぬ。

偶上梓したる歌集に因みて玄冬居と名づけたれども、宿縁薄くして住むこと五月、遽かに遠く北陸に向つて去れり。その間の吟詠乏しきもうべや。

〔3〕吉井勇「私の履歴書」⑩「京都へ移る」（『日本経済新聞』昭和32・4・19）

〔4〕令和二年三月、翁久允旧居（富山市磯部町）より吉井勇の翁宛書簡、雑誌「高志」へ寄せた原稿「高志に寄す」など約80点が新たに発見されている。

〔5〕原田良次『日本大空襲 本土制空基地隊員の日記』（令和元・7、ちくま学芸文庫）一〇一頁を参照。本土爆撃については、同書の「II マリアナ基地からのB29渡洋爆撃」の記述によった。

〔6〕「SUMUS」第4号（平成12・9）掲載の林哲夫「甲鳥書林周辺」の「養徳社の謎」の章による。

〔7〕京都に大規模な空襲が行われなかった実際の理由は、吉田守男の「京都小空襲論」（『日本史研究』昭和58・7）により、原爆投下の第一目標とされていたためであることが明らかになっている。「文化財保護説」が戦後GHQによる宣撫工作の一環であったことは、吉田の『京都に原爆を投下せよ』（平成7・7、角川書店）に詳しい。

〔8〕『かくされていた空襲―京都空襲の体験と記録』京都空襲を記録する会・京都府立総合資料館編（昭和49・4、汐文社）。被害状況などは、同書九十三頁の「一九四五（昭和二〇）年京都空襲被害一覧表」によった。

〔9〕「京都・馬町空襲被害地図」のパンフレットは、故村中秀光氏の撮影した「空襲」ネガフィルムをもとに、京都女子大学文学部史学科の学生たちによる「馬町空襲の歴史を学び語り継ぐ取り組み」（代表・坂口満宏教授）の一環として二〇一八年一月に制作された。

〔10〕京都大学基礎物理学研究所湯川記念館史料室のホームページに、小沼通二氏による解説で、一九四五年の「湯川秀樹研究室日記」が公開されている（二〇一八年四月六日改訂版公開）。馬町空襲（東山爆撃）については、一月二十五日に詳細な被害情報が記されている。当時被害の実態については公にされておらず、湯川はおそらく軍部か府の関係者から聞いたものと推定される。

1月25日（木）
1月16日夜 東山爆撃結果 11時15分投弾 24分警報発令
高度3000以上 爆弾50珎（キログラム）13個以上
焼夷弾2個 落下地点 鳥辺山墓地、三島神社、修道校、

妙法院前、京都幼稚園、東山洪谷通り

死者34名 即死17名 重傷23名 軽傷26名
家屋全壊廿余戸 半壊112戸 全焼2戸 罹災者750名
敵機は西南より来り東北に去る 灯管不良。硝子破片にて負傷多し 布団を被ること 硝子戸開けること

〔11〕「戦後『短歌風土記』として刊行されたのは『短歌風土記 大和の巻一』（昭和20・11）と『短歌風土記 山城の巻一』（昭和22・6）の二冊で、「越中能登加賀の巻」は編まれていない。

〔12〕「吉井勇の戦中疎開日記（上）——「北陸日記」抄」（静岡県立大学『国際関係・比較文化研究』第16巻第2号、平成30・3）、「吉井勇の戦中疎開日記（中）——「續北陸日記」抄1」（静岡県立大学『国際関係・比較文化研究』第17巻第1号、平成30・9）、「吉井勇の戦中疎開日記（下）——「續北陸日記」抄2」（静岡県立大学『国際関係・比較文化研究』第18巻第1号、平成31・9）

【付記】

*本稿は、科学研究費学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（一般）17K2457）による研究成果の一部である。

なお、本稿執筆にあたって、京都府立京都学・歴史館の大塚活美氏、京都女子大学の坂口満宏先生、北日本新聞社の近江龍一郎氏、公益財団法人翁久允財団の須田満氏、八尾おわら資料館、その他多くの方々より、資料提供をはじめとする懇切なご教示・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。